

解答・解説

問1 まず、指示語を押さえる。「かやうの道」とあるが、「かやう」は「このような」の意で、ここでは大宮司殿が文正の娘を自分の息子の妻にするように迫ることに関係する道、つまり男女の結婚の縁のことを指す。次に、「高きにも賤しきにも」を解釈する。これは一種の慣用句で、身分のことである。「高き賤しき」または「上(中)下」とくれば、前に「身分の」を補う。

選択肢判定チェック

- ア 親子の立場や間柄については言及されていない。(×)
イ 結婚相手は、身分さえ高ければ当人の人柄は問題でないというものではない。
文正と大宮司殿の主従関係は、ここでは問題にされていない。(×)
ウ 人間の間柄は、かつての主人ならば相手を従わせられるというものではない。
「かやうの道」が男女の縁「高きにも賤しきにも」が身分の高低となっている。(○)
エ 男女の縁は、身分の高低を理由にして無理に決められるというものではない。

よって、正解はエ。

問2 それぞれの人物の発言の内容や振る舞いを正しく解釈する。

- ・文正の娘たち―涙を流し、大宮司殿の申し出に従うように強いるならば出家すると言う。
・文正―大宮司殿に合わせる顔がないと思いつつも、娘の様子をありのままに伝える。
・大宮司殿―「なんぢが子供の分として、自らを嫌はんこと、不思議なれ」と怒りをあらわにする。
・文正―また娘の元へ帰って大宮司殿の言葉を伝える。
・文正の娘たち―同じ主張、すなわち無理に結婚させるなら尼になることを繰り返し言う。

選択肢判定チェック

- ア 文正の娘たちは、望まない結婚を強いようとする大宮司殿をのしつた。
イ 文正は、大宮司殿を怒らせたくなくて娘たちを説得しようとした。
ウ 大宮司殿は、文正の娘たちが結婚の話承諾するのは当然だと思っていた。
エ 文正とその娘たちは、互いに主張がかみ合わず、縁を切ることにした。

よって、正解はウ。

古文の世界

出家

つらくはかない世の中(「憂き世・浮き世」)で思いどおりにならないことがあったとき、人々は出家することを考えた。出家を指す語句は重要だが、婉曲的な表現が多く、知らなければ見落とすので注意。本文には「尼になる」という直接的な表現と並んで「世を厭ふ」とあるが、「世を背く」「世を捨つ」も同意。人間関係や地位、財産など、現世の自己を捨てることからこのように言う。また、「御髪下ろす」「頭下ろす」「様変ふ」など、剃髪したり僧衣を着たりすることを指す表現もある。本文に「さなくは、淵河へも身を入れん」とあるとおり、出家は命を投げ出すのに等しい重大な行為であった。

出典
御伽草子

短編の物語で、室町時代から江戸初期にかけて作られたものの総称。作者未詳。教訓的・童話的・空想的内容のものが多く、「一寸法師」「鉢かづき」「酒呑童子」などが有名。

3 復習 「御伽草子」

解答・解説

文法Q 省略Q 解答と品詞分解・現代語訳

姫たちはあさましげなるけしきにて、涙の色見えければ、あきればてぞゐたりける。姫たち仰せけ
姫たちは驚きあきれている様子で、
涙を見せたので、
文正は すっかり呆然としきつて座っていた。
姫たちがおっしゃった

動詞 ヤ行 下二段 活用 連用 形

形容詞 ク 活用 連体 形

るは、「いかなる女御后にも、または位高き公達などこそ、もしも思ひつき候はんずれ。さなくは、尼に
「ここには、」このような女御や后（の位）にも、または身分の高い貴公子（の妻）などにも、あるいは（なろうと）思い及びましよう。そうでなければ、尼に

動詞 ラ行 四段 活用 連用 形

なりて後世菩提を願ふべし」と申しける。文正面目なく、大宮司殿にこのありさまを申せば、大宮司殿
なつて来世の幸福や極楽往生を願うつもりだ」と申し上げた。 文正は合わせる顔がなく、大宮司殿にこの（姫たちの）様子を申し上げると、大宮司殿は

形容動詞 ナリ 活用 已然 形

腹を立て、「なんぢが子供の分として、自らを嫌はんこと、不思議なれ。急ぎ参らせずは、なんぢを罪科
腹を立て、「お前の子供の分際として、私を嫌うようなことは、非常識だ。急いで（自分の息子のもとへ）参上させないならば、お前を罪人

娘（姫たち）を

文正に

形容詞 シク 活用 連体 形

の道は高きにも賤しきにもよらぬことにて候へ。ただ尼になりてうき世を厭ふか、さなくは、淵河へも
ような道（＝男女の道）は身分の高いことにも低いことにもよらないこと（それを無理に結婚させよとするのなら）ただ尼になってつらい現世から隠遁するが、そうでなければ、淵や河へも

身を入れん」と嘆きける。
身を投げ入れよう」と嘆いた。

単語Q 解答

- ア 様子。
- イ 呆然とする。
- ウ どのような様子。
- エ 次第。話のおおむね。